先生になって３８年間　シリーズ①

１０年一昔と言われますが，四昔くらい前の話をします。

私の初任は昭和４７年です。県境の山間の小さな小学校でした。コンビニなどもちろん無い時代で学校の前にノートや消しゴムを売る雑貨屋が一軒だけありました。食料品といえばガラスケースに入った賞味期限不明のパンとインスタントラーメンぐらいでした。雑貨屋のおばちゃんは人一倍世話好きで気前がいい人でした。子どもたちから「インスタントラーメンを２個以上買えばアメ玉を１個おまけしてくれる…」という話を聞いて，その日に２個買いましたが私にはアメ玉はくれませんでした。おばちゃんに抗議する勇気もなく，次の日学級の子どもたちに，「先生にはおまけは無かったぞ」と訴えると，一人の子どもが「そりゃ，大人にはないやろ。ほしいんやったら言うたろか。」

「い…いえ，結構です。」

この店で買ったあんパンに小さなカビがはえていたことがあります。この時も小心者の私はおばちゃんに直接抗議できなくて子どもたちに不満を言ったことがあります。すると「ぼくだってカビはえたパンを買っておばちゃんに文句言ったら，おばちゃんがそのパンを取って，ぱっぱっとカビをはらって『こんでいいやろ』ってくれた。」　「そんでどうした？」　「食ったよ！」

駄菓子屋のおばちゃんは強引でたくましかったし，何より当時の子どもは寛容でした。思い返せば大学出たての新米教師が学校の中でいちばんひ弱だったのかも知れません。

ひ弱な３８年目の新米教師がちょうどあの時のように職員室へやってくる生徒たちに毎日語りかけることができることに幸せを感じています。

先日，一人の生徒が職員室の私の机を見て，「ねえ，校長先生の机はなんで教頭先生のより小さいの？」　「教頭先生はいっぱい仕事をするからだよ。」

「じゃ，校長先生はあんまり仕事をしないの？」　「…」

横で聞いていた担任がひやひやしながら，「こらこらあんまり職員室でおしゃべりするもんじゃない。用事が終わったらさっさと出ていきなさい！」

教師のスタートは必ず子どもとの出会いであり，経験を積んだ教師がうぬぼれようとするとき，いつでも原点にひきもどしてくれるのが子どもです。